

「アイウエオの歌」による皇民化教育

専修大学 萱間隆

1. 目的

日本初の長編アニメーションとされる『桃太郎 海の神兵』（1945）には、南方の島に住む動物達に日本海軍が日本語を教える場面がある。この挿入歌として用いられる「アイウエオの歌」は、従来、占領地で日本語教育のために歌われていたとされていたがその詳細については不明であった。そこで本報告では、この歌がどのように誕生し、どう普及していったかを論じた上で、皇民化教育の一環として利用されていたことを主張する。

2. 方法

調査対象に関する記述が複数の資料にまたがって存在するため、アジア・太平洋戦争（1941-1945）中に発行された新聞や雑誌の言説を総体的に調査する。具体的な資料としては、『読売新聞』などの全国紙、『ジャワ新聞』のように占領地で刊行されていた新聞、『音楽文化新聞』などの音楽専門誌、そして、通信社が発行していた『同盟通信』を主に取り扱う。

3. 結果

2つの論点から整理する。まずは、歌自体の発祥とその普及過程についてである。「アイウエオの歌」の作曲者はこれまで『海の神兵』の制作にも関わっていた古関裕而とされていた。しかし、調査の結果、海軍軍楽隊の可能性が浮上した。資料によるとこの歌は1942年5月27日の海軍記念日に、日本語教育を目的としてシンガポールで歌われたとされている。さらに、シンガポールの児童が歌う「アイウエオの歌」は録音され、日本のラジオで放送されたり、レコードが発売されたりしている。

もう一つの論点は、映画版の『アイウエオの歌』である。『海の神兵』の監督である瀬尾によると、「アイウエオの歌」を取り入れた映画があったとしている。倉沢（1992）は、「日本で南方向けに制作された映画」のリストの中に「アイウエオノウタ」という作品を挙げており、瀬尾が述べた映画と同一のものと考えられる。さらに、その内容は主題歌のみを流し続けるものだったと述べている。『ジャワ新聞』の映画上映欄を調査すると、この映画『アイウエオの歌』は1943年から1945年にかけてたびたび上映されていたことが確認できた。さらに、ダバオ（フィリピンの都市）では、この映画が契機となって「アイウエオの歌」が盛んに歌われているとする資料もあった。

4. 結論

1つ目の論点からは、海軍がこの歌を皇民化教育の一環として利用し、さらにはその様子が日本国内にも伝わっていたことが分かった。また、2つ目の論点から、占領地向けの映画が制作されることで、「アイウエオの歌」の皇民化教育としての役割はより強固なものになっていったと考えられる。海軍省の命により制作された『海の神兵』に「アイウエオの歌」が挿入歌として用いられたことは、このような環境下でなされたことを考慮する必要がある。

参考文献

倉沢愛子（1992）『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社。